

2007 年度 教師海外研修報告書

派遣国：インドネシア



2008 年 3 月
独立行政法人国際協力機構兵庫国際センター
(JICA 兵庫)

後援 外務省 文部科学省 日本私立中学高等学校連合会
兵庫県教育委員会 神戸市教育委員会

運営委託先 社団法人青年海外協力協会 (JOCA) 近畿支部

兵セ

JR

08-001

目 次

はじめに	1
1. 教師海外研修とは	
1-1 教師海外研修の主旨	2
1-2 教師海外研修の流れ	2
1-3 2007年度 JICA 兵庫実施の海外研修について	2
1-4 海外研修訪問先	6
1-5 参加者リスト	10
1-6 主要面会者リスト	11
2. 研修報告書	
2-1 出発前	
(1) 研修に期待すること	12
(2) 日頃の開発教育・国際理解教育の実践を通じて感じていること(問題点)	15
(3) 海外研修に向けての抱負(目標)	17
2-2 海外研修	
(1) 良かったと感じた(期待に応えた)海外研修の内容(上位5件)	19
(2) 収集した資料・教材	21
(3) 授業・学校生活への活用	24
(4) 海外研修に関する全般的な所感・意見	27
2-3 帰国後 ～来年度に向けて～	
(1) 派遣前研修に関する所感・意見	29
(2) 海外研修に関する所感・意見	31
(3) 今後の本研修参加者へのアドバイス	33
3. 授業実践報告書	
3-1 古角 美之	35
「兵庫県における子ども多文化共生教育の取組について」「実践報告資料」「授業案」	
3-2 岸岡 歩 「三つの国ウォッチング」	47
3-3 日下部 望 「世界を知ろう(インドネシアの紹介を通して)」	54
3-4 柴田 貴也 「神河町からインドネシアにズームイン！」	64
3-5 濱田 理 「インドネシアのことをもっと知ろう」	71
3-6 大窪 麻紀 「国際理解(見えないものを見る)～経済格差から考えてみよう!～」	76
3-7 岩本 芳仁 「インドネシアを知る」「インドネシアのストリートチルドレン」	94
3-8 藤川 綾香 「豊かさとはなんだろう～インドネシアを通してみえるもの～」	100
4. 授業実践報告会	
4-1 授業実践報告会	111
4-2 授業実践における反省点、難しかった点	113
4-3 研修での経験を教室や地域でどのように伝えるか(分科会より)	113
4-4 授業実践報告会参加者の声	113

参考資料

- | | |
|---|----------|
| 1. JICA (Japan International Cooperation Agency) とは |114 |
| 2. 本研修参加応募用紙 |115 |

はじめに

独立行政法人国際協力機構兵庫国際センター（以下「JICA 兵庫」という。）では、開発教育支援事業の一環として、現職の教職員を対象とした海外研修を毎年度実施しています。この教師海外研修は、中央レベルでは外務省および文部科学省、兵庫県内では兵庫県教育委員会と神戸市教育委員会から後援を受けており、JICA 兵庫は 2007 年度には 8 人の教職員をインドネシアに派遣しました。

研修参加者は、日本文化を紹介するための玩具や写真を持参したり、全員で何回も練習を繰り返したソーラン節を披露したりして、国境を越えた心の交流をしてきました。また、ストリートチルドレンの自立支援をする NGO や、震災の復興支援をする青年海外協力隊の活動を視察したことで、研修に参加した誰もが「国際理解教育の大切さ」について身をもって実感できたのではないのでしょうか。

本研修の目的は、「教師の見聞を広げる」ことだけではなく、派遣国での滞在経験を帰国後に学校・児童生徒・同僚の教員へ還元することです。研修中は、現地の料理を食べ、現地のことばにも挑戦し、五感で色々なものを吸収して帰国します。「日頃から接している私たちの先生」が行ってきた国というだけで、教科書では伝えきれない開発途上国の現状を、臨場感を持って周囲に伝えることができるのです。

帰国後は、JICA 兵庫が研修参加者の実践授業を視察して助言し、本海外研修の成果を授業実践に生かせるようフォローアップしています。そのため、報告書作成においても、参加者それぞれがどのように授業展開をしたのかに重点を置いています。この報告書を手に取った教職員の方々は、ぜひご自分の学校における開発教育・国際理解教育の授業の参考にさせていただきますようお願いいたします。

JICA 兵庫は、兵庫県教育委員会および神戸市教育委員会とは、多文化共生のための国際理解・開発教育セミナーおよび子ども多文化交流&JICA 国際協力フェスティバルを共同で実施したり、国際協力実体験プログラムおよび JICA 国際協力中高エッセイコンテストに後援していただくなど、連携を強化しております。「国際協力にあたって、国のメリットだけではなく、そこにいる人間のメリットも考慮する」という JICA の理念と、「人種、宗教などさまざまな立場・価値観を持つ人たちの人権を尊重し共生していく」という兵庫県教育委員会が打ち出している多文化共生の概念は、「一人ひとりを大切にする」という取り組みであるといえます。国際理解教育が、学級の仲間一人ひとりを大切にする教育へと繋がることを期待しております。

また、JICA 兵庫では、本研修のほかにも、JICA ボランティア経験者や JICA 職員を学校に派遣する「JICA 国際協力出前講座」および児童生徒たちの「JICA 兵庫訪問プログラム」を常時実施しておりますので、ぜひ学校で活用していただければ幸いです。

2008 年 3 月
独立行政法人国際協力機構
兵庫国際センター
所長 森川 秀夫

1. 教師海外研修とは

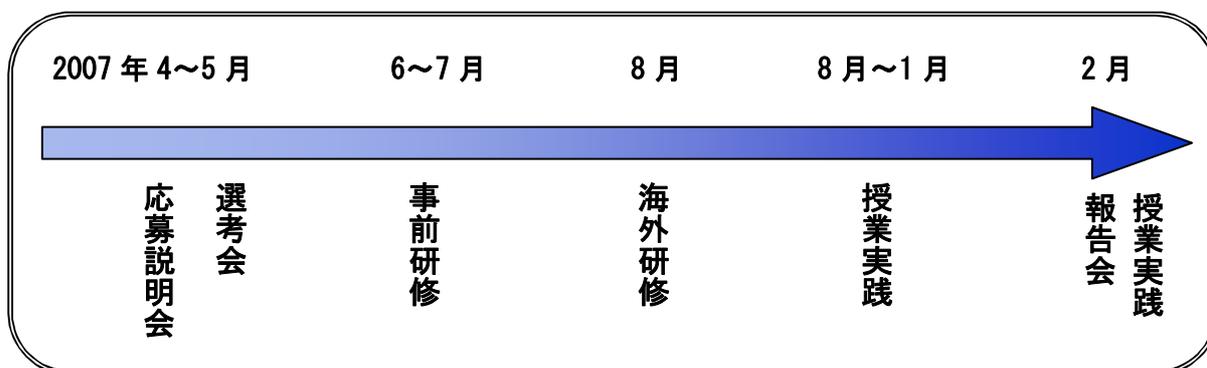
1. 教師海外研修とは

1-1 教師海外研修の主旨

2002年4月から「総合的な学習の時間」が本格導入されました。JICAは、総合的な学習の時間での取組みが期待される様々な国との関係や異文化理解について、今までに培った経験や人材・ネットワークを活用し、開発教育支援事業の一環として、教育現場に積極的に協力しています。

本研修は、国際協力に関心があり、授業やクラブ活動などで国際理解教育や開発教育を実践している小学校・中学校・高等学校の教員を対象に、開発途上国で国際協力の現場を視察し、今後の授業に役立ててもらうことを目的とした研修プログラムです。

1-2 教師海外研修の流れ



1-3 2007年度 JICA 兵庫実施の海外研修について

(1) 派遣国概要

国名：インドネシア共和国
(Republic of Indonesia)
首都：ジャカルタ
面積：190万5000km²（日本の約5倍）
人口：2億2,278万人（世界第4位）
民族：ジャワ族・スンダ族など27種族
言語：インドネシア語
(その他250以上の地域言語)
宗教：イスラム教（約90%）ほか
独立：1945年8月17日



(2) 研修日程

第1回教師海外事前研修：2007年7月2日（月） JICA兵庫にて実施

- 目的：
- ① 研修後に「総合的な学習」などを利用して、開発教育（国際理解教育）へ取り組む際の考え方や具体的手法について学ぶ。
 - ② 研修後の情報交換に役立つ参加教員間のネットワーク作りを促進する。
 - ③ 参加者間の親睦を図り、現地での視察のポイントや注意点を確認することで、海外での研修をより実り多いものとする。

- 研修項目：
- ① 教師海外研修事業説明
 - ② オリエンテーション（渡航上の諸注意、海外旅行保険）
 - ③ 研修国事情
 - ④ 過去の参加者による報告/授業実践
 - ⑤ 参加型ワークショップ

第2回教師海外事前研修：2007年7月31日（火） JICA兵庫にて実施

- 目的：
- ① 帰国後の授業実践をより実りあるものにするために、海外研修における目的の再確認をする。
 - ② 海外研修において渡航上の注意点などの最終確認及び現地での視察のポイントや注意点を再確認する。

- 研修項目：
- ① 海外研修について（出発まで、帰国後の流れ、現地での活動目標設定）
 - ② 渡航上の注意（安全、健康、非常時の対策）
 - ③ ワークショップ「より実りある帰国後の授業実践にむけて」

多文化共生のための国際理解教育・開発教育セミナー：

2007年8月9日（木）、10日（金） JICA兵庫にて実施

- 目的：
- 学校現場において児童・生徒が自分自身で考えるワークショップの手法を体験するとともに、経験豊富な講師陣から教室ですぐに使えるアレンジ法の紹介や指導案を組み立てるための情報や資料の提供を行なう。
(一般参加者100人と共に、本研修参加者も参加した。)

研修項目 次ページ参照

- 参加者の声
- ・ 教師海外研修で撮ってきた写真をどのように使うか、現地で実際に感じたことや子どもたちに伝えたいことなど、授業を行うための手法の勉強になった。
 - ・ 複数のワークショップを実際に体験し、教材や資料をその場で購入できて良かった。
 - ・ 講師や他の参加者とのつながりができた。

● 8/9(木)

13:00-14:30 基調講演

「共に生き、共に学ぶ」秦 辰也さん(シャンティ国際ボランティア会専務理事)

カンボジア難民の救援活動をきっかけに、NGOスタッフとしてタイ、ラオス、アフガニスタンなど各国で国際協力を続けてこられた講師より、ご自身の経験と日本のNGOの歩み、そして国際理解教育、開発教育の必要性についてお話しいただきます。

14:40-16:10 セッション I

a. 「これ、かわいい」から「選ぶからにはこれ！」へ	b. 地球にやさしいって、どういうこと？	c. 「豊かに共生する心」をはぐくむ
<p>桑原 英文さん (ECC社会貢献センターアドバイザー) 衣服、食べ物、テレビの番組、本など私たちは普段からいろいろなものを自分の尺度や都合で選んで生活しています。選ぶとき、そこに「社会」の視点が入ると、どうなるのでしょうか？身近なもの、遭遇する場面で考えてみましょう。</p>	<p>荒川 共生さん (アジアボランティアセンター職員) 最近バイオエネルギーの原料としても注目され始めたパーム油。植物由来の油として「地球にやさしい」というイメージがあります。でも実際はどうなのでしょう。パーム油をめぐる課題と私たちのつながりを考えるワークショップです。</p>	<p>樋口 正和さん (子ども多文化共生センター指導主事) 県内の子ども多文化共生教育にかかる現状と課題を理解するとともに、どうすればすべての児童・生徒に「豊かに共生する心」をはぐくむことができるのか、ワークショップをとおして、ともに考えます。</p>

16:20-17:00

まとめの時間 初日の学びや、教育現場での実践を分かち合う。

● 8/10(金)

13:00-14:30 セッション II

a. 「食べるものが足りません」をどうしよう	b. わたしが難民になったら	c. 写真をつかった授業の効果的な授業手法 「何を伝える？」
<p>藤野 達也さん (PHD協会職員) 国際協力と名がつけば、何でもいいことなのでしょうか。せっかくの気持ちや協力がちゃんと役立っているのか、誰のために行われているのか、私にできることは何だろうかなどについて、皆さんで考えるケーススタディ。</p>	<p>中尾 秀一さん (難民事業本部関西支部職員) 兵庫県は全国で2番目に多くの難民が住む県です。難民とはどんな人のことか。なぜ難民になってしまうのか。どんな生活を強いられているのか。難民の発生から帰還までをシミュレーションしながら、難民問題について考えます。</p>	<p>堀田 直揮さん (社団法人青年海外協力協会職員) 写真を単純に見せるだけでは、生徒の関心をひくことにはつながらない場合もあります。ここでは、写真をつかって児童生徒たちが自発的に考え、写真を読み解く中から気づきや発見につなげる手法を学びます。</p>

14:40-16:10 セッション III

a. 楽しく学ぶ防災・リサイクル	b. ポーポキ、平和ってなに色？	c. 「貿易」から学ぶこと
<p>永田 宏和さん (iop 都市文化創造研究所代表) 使わなくなったおもちゃやアクセサリー、絵本などを交換するシステム「かえっこバザール」と防災訓練を組み合わせ、国際協力や世界の問題を「楽しみながら知恵や技を伝える」体験型のワークショップキャラバンの手法を学びます。</p>	<p>ロニー・アレキサンダーさん (神戸大学大学院国際協力研究科教授) 平和について問いかける猫のポーポキの絵本を出発点に、創作活動などを通して一人一人が自分自身の五感で「平和」をとらえ、「平和」という言葉の多面性と豊かさ、大切さを実感しながら、実際の自分と社会の平和につないでいくワーク。</p>	<p>山中 信幸さん (柳学園中学・高等学校教諭) 「貿易ゲーム」を体験することにより、先進国と途上国の経済的あるいは社会的な格差をはじめとする国際社会の問題について考えます。またその解決の方途についても考えましょう。</p>

16:20-17:00

クロージング・セッション 2日間のセミナーを振り返り、明日からの実践にどう活かすのか考える。

海外研修日程表

2007年 月 日	曜	日 程	宿泊地
8月1日	水	JICA 兵庫 ⇒ 関西空港発 シンガポール経由 ⇒ ジャカルタ着	ジャカルタ
8月2日	木	①JICA インドネシア事務所訪問／オリエンテーション	
		②タンジュンプリオク港緊急改修プロジェクト視察	
		③ストリートチルドレン施設(JICA-NGO デスク) Setia Kawan Raharja Foundation 訪問	
8月3日	金	④市民社会の参加によるコミュニティー開発技術協カプロジェクト(JICA-NGO デスク)Bina Suwadaya 視察	
		⑤生物学研究センター(JICA 技術協カプロジェクト)訪問	
		⑥夕食会(JICA 関係者との意見交換会)	
8月4日	土	ジャカルタ ⇒ ジョグジャカルタ	ジョグジャカルタ
		⑦ポロブドゥール遺跡観光	
8月5日	日	⑧京都大学東南アジア研究所の活動先(ジョグジャカルタ 特別州バントウル県ゲシアン村)訪問・交流・日本文化紹介	
		⑨同村にてホームビジット(昼食交流)	
8月6日	月	⑩デポック郡第5公立中学校(青年海外協カ隊員・理数科 教師活動現場)訪問	
		⑪マルチメディア訓練センター 訓練機材整備プロジェクト視察	
8月7日	火	⑫ジャワ島中部地震復旧復興支援の現場訪問	
		⑬午後 自由時間	
		⑭夕食会(青年海外協カ隊員 7 人との意見交換会)	
8月8日	水	ジョグジャカルタ ⇒ ジャカルタ	機中泊
		⑮JICA インドネシア事務所帰国報告会	
		⑯書店・文房具店 ジャカルタ発 ⇒ シンガポール経由 ⇒	
8月9日	金	⇒ 関西空港着 ⇒ JICA 兵庫	
		JICA 兵庫主催「多文化共生のための国際理解教育・開発 教育セミナー」に参加	

※視察＝施設を見学した。

訪問＝施設を見学し、文化交流や意見交換を行った。

※本研修では毎年ホームステイ(宿泊あり)を実施しているが、本年度は派遣国インドネシアの治安事情により、ホームステイの代わりにホームビジット(宿泊なし)を実施した。

1-4 海外研修訪問先



①JICA インドネシア事務所訪問／オリエンテーション

最初に JICA インドネシア事務所を訪問し、所長・次長からインドネシア国の概要、国際協力、教育事情などについて詳しく説明を受けました。その後、私たち（本研修参加者のこと。以下同様。）は、教師海外研修での抱負を述べました。

<参加者の感想>

・インドネシアは途上国の中では開発が進んでいる方であり、このまま進めば援助が必要なくなることが分かった。少し自分の抱いていたイメージとは違った。街並みも（都市だからか）とても整然としていてビルも多く発展していると感じた。後で分かったが、地方と都市で差が激しい。環境に対しては非常に意識が薄いらしい。



②タンジュンプリオク港緊急リハビリ事業 （航路拡幅、港湾敷地道路改良）視察

日本の国際協力が現地でどのように実施されているか、ODA（政府開発援助）の円借款プロジェクトであるジャカルタ国際ターミナルコンテナターミナルを視察しました。

<参加者の感想>

・「貿易港」であり、これからインドネシアの貿易の窓口になるであろう、重要な場所だった。かなりのお金や期待がかけられているように感じられた。



③ペーパー・リサイクル技法を通してのストリートチルドレンのエンパワーメント（仮訳）

Setia Kawan Raharja Foundation 訪問

地元NGOと共同して実施しているストリートチルドレンの自立支援の現場を訪問しました。元ストリートチルドレンの子どもたちと直接交流し、社会観や人生観など色々な話を聞くことができました。

<参加者の感想>

・路上で生活することもたちに寝る場所と仕事を斡旋している施設。9歳～17歳の子たちが生活している。しかし、みんな陽気で明るく歓迎してくれた。楽しみはと質問すると、皆と一緒に何かをすることだとのこと。仲間との結束が強いことを感じた。しかし、特に金銭的な面で将来に対する不安を皆が抱えていた。



④CEP・Bina Suwadaya PAHALA コミュニティーグループ （環境関連の市民社会の参加によるコミュニティー開発 技術協力）の視察

地元NGOと共同して実施している環境問題対策の現場を訪問しました。開発されたカッティングマシンを使って、草木を細かく細断してリサイクルがされていました。その後RT15という村に行き、ゴミを堆肥にする現場を見せてもらいました。

<参加者の感想>

・一番大切なことは、皆の考え方が変わることであり、様々なルールや習慣があってもそれを守らなければ意味がないし、自分の考え方しっかり持つことが大切である。
・ゴミ処理など環境対策が遅れているインドネシアにて、家庭ゴミの再生をJICA支援のもとで行っている村を訪問できてよかった。

⑤生物学研究センターの標本管理体制及び生物多様性保全のための研究機能向上プロジェクト(JICA 技術協力)訪問



東南アジアにおいて、一番のコレクション数を誇っている生物多様性センターを訪問し、プロジェクトで働くJICA 専門家の小林専門家や福岡専門家から説明を受けました。インドネシアの生物を後世に残すという意味では、長期的なビジョンで意義のあることだと感じました。南国のフルーツを実際に切って試食させてもらいました。

<参加者の感想>

- ・インドネシアには、世界の 20%もの野性動植物が生息しており、熱帯雨林の貴重な世界有数の生物多様性を有している。日本から多額の資金援助をしたり、研究者が日本の大学で学んだりして、日本の援助がここまで及んでいることに驚いた。センターをインドネシアの学生や市民に開放して、広く活用できるようにして欲しい。日本にもないような施設で、素晴らしい研究者がいる一方、保全活動への住民参加活動がまだまだだということがわかった。
- ・日本が資金援助を行い、インドネシアに国際的な規模の生物研究所を開発するという計画。様々な標本や資料が多数あり、中でもシーラカンスの標本を見られたことはとても感動した。

⑥夕食会(JICA 関係者との意見交換会)



現地で国際協力に従事する小林専門家や福岡専門家、JICA 事務所の水野次長、ナショナルスタッフのエリンさんから活動や生活を通して感じたインドネシアという国や、人々の姿、社会や文化について聞き、日本との色々な違いや特徴を教えてくださいました。

<参加者の感想>

- ・活動には結果が常に求められるが、JICA の活動は成果が目に見えないことも多く、隊員は自分の思いと結果主義のなかで活動しなければならぬ。

⑦ボロブドゥール遺跡観光(ODAプロジェクト)



世界遺産であるボロブドゥール遺跡を見学しました。間近に見る世界遺産の雄大さに感動しました。

<参加者の感想>

- ・頂上からの景色は心を洗われるようだった。どのようにして作られたかは不明だが、高度な技術と多くの人の願いが込められていたことが伺えた。新しく修復した石には彫刻をしないというところが、反対に建造物に対する礼儀なのかもしれないと感じた。

⑧京都大学東南アジア研究所の活動先(ジョグジャカルタ特別州バントゥル県ゲシアン村)を訪問・交流・日本文化紹介

NGO概要 被災時の緊急集会場は基本的には「モスク」であり、モスクがない場所には集会場がない。そういった問題をクリアするために京都大学大学院東南アジア研究科が実施研究している「プカランガン」の中の施設を訪問した。ここでは被災時の集合場所としてのみならず、常に紙芝居や人形劇を用いた防災教育・子どもたちの絵画展示などを行っている。(プカランガン=ジャワ島の屋敷林のこと。熱帯地域では、様々な樹木作物とともに、草本作物も栽培される。日本の屋敷林に完全に対応する用語はないが、ホームガーデン homegarden(屋敷畑)という用語が広く知られている。とくにインドネシアジャワ島のそれは、農家の住居を取り囲むように樹木が植えられており、まさに屋敷林そのものといえる。)



よさこいソーラン、剣玉、こま、竹とんぼ、なわとび、折り紙、書道などの日本文化紹介を通して、インドネシアの文化・習慣等を理解し、現地の人々との交流することができました。

<参加者の感想>

- ・ソーラン節の踊りで子供たちやその保護者の心をガッチリと掴んだ。その後の日本文化紹介や遊びも有意義に進んだ。国際理解は自らで自らの殻を叩き割って真の自分の姿を見せることで人間同士の交流が実現できる。
- ・日本文化の紹介は、楽しいひと時でした。子供たちが、こまや剣玉に向きになっている様子は日本と変わらない風景でした。暑いので外で遊びたがらないのも日本と変わらない様子で驚いた。小学校の生徒の数が自分の学校と同じくらいだったので、文通等を含めてこれからも交流を続けていきたいと思った。



⑨同村でのホームビジット(屋食交流)

実際に家庭を訪問させていただきました。何種類ものお料理と、親族みんなのおもてなしを受け、感激しました。一緒に子どもと遊んだことも楽しかったです！

<参加者の感想>

- ・朝から準備してくれ、私たちが待っていてくれたことに感激した。お客さんとして大切にしてくれた。
- ・親族のつながりを強く感じた。家族、人を大切にしている。家族写真もたくさん自慢げに見せてくれた。
- ・お茶をたてたり、浴衣を着せてあげたり、習字をしたり、折り紙をしたりして日本文化を紹介できたこともよかった。



⑩デポック郡第五公立中学校

(青年海外協力隊員理数科教師活動現場)訪問

私たちが訪問して、南中ソーランを披露するととても喜んでくれ、一緒にインドネシアダンスの輪の中にいれてくれました。授業がぶれて喜ぶところは、日本の中学生と同じです。

<参加者の感想>

- ・教師に制服があり、教室には必ず大統領と副大統領の写真があることに驚いた。
- ・休み時間におやつを買ったり、ピアス・指輪・携帯電話がOKであったりするのは、自由だと思った。
- ・教師は絶対的な存在だと聞いたが、なめられている先生もいた。



⑪インドネシア国マルチメディア訓練センター

訓練機材整備プロジェクト視察

途上国であるインドネシアでは機材の方が早く、技術が追いついていかないそうで、そのあたりでもどかしさを感じると言われていました。60%以上の家庭がテレビを持っているそうです。

<参加者の感想>

- ・震災の多い国であるため、震災緊急連絡が必要であるが東西に長い国ということもあり、なかなか全体まで浸透しないということに、その国なりの問題があると感じた。
- ・放送に興味を持っていることは、どこでも同じだと思った。



⑫ジャワ島中部地震復旧復興支援現場訪問

地震で脊髄を損傷しながらもリハビリに励み、学校に戻り仕事に励むシアンさん。震災からずっと一人でテント暮らしをしているサルシエルさん。お二人から貴重なお話を伺い、本当の支援について考えました。

<参加者の感想>

- ・シアンさんの強い精神力に感動した。原動力として「家族、仲間の存在」と挙げたことに人のつながりを大切にする国民性を感じた。
- ・シアンさんとは逆に、家族とのつながりが薄い人は、インドネシアで生活していくのはつらいだろうと思った。入院をすることもできないなど独りの人に対しての国の取り組みが遅れている。
- ・本当の支援は一時的なものではなく、自立支援であると分かった。



⑬自由時間

それぞれでタクシーに乗って買い物に行ったり、屋台で昼食をとったり自由な時を過ごしました。スーパーマーケットのお買い物は楽しかったです！「HALAL マーク」(イスラム教徒の多いインドネシアでは豚肉を一切用いていないことを表す表示は大切)のついたお菓子を買って、日本の子どもたちに見せ、食しました。

<参加者の感想>

- ・服は安かった！アクセサリも安いけれど、初めは随分ふっかかられた。特に露店で売っているものは値段があってないようなもの。
- ・食品は種類が思ったより多かった。
- ・町には、人力タクシー(ベチャ)がたくさん走っていた。



⑭夕食会(青年海外協力隊員との意見交換会)

看護師さん、料理を教えている先生、理数科の先生などから興味深いお話を聞かせてもらいました。インドネシア料理も満喫して、最後のボリュームたっぷりのデザートまでいただき、大満足でした。楽しい話、苦労話、いろいろ本音を語っていただきました。

<参加者の感想>

- ・看護師さんの「私たちが帰ったらどうするのかと心配な独り暮らしの人々がいる。」という言葉に精神的に果たして役割も大きいのだと感じた。
- ・理科の先生は「学校の中での自分の立場」というものに悩んでいたようだったが、日にちが経つにつれそれが明確になり、とてもやりやすくなったと言っていた。



⑮JICA インドネシア事務所／帰国報告会

ちょうど選挙が終わったところで、インドネシアの諸事情を聞かせてもらいました。私たちの報告をするとともに、8日間では分からない部分のことをたくさん教えていただきました。「母子手帳」などJICAの事業として全国に定着したもの(こと)が数多くあることにも気づきました。



⑯スーパーマーケット訪問

インドネシアでの最後の買い物ということで、買い残のないようにいろいろ見てまわりました。でも、食料品をみんな一番多く買っていたような気がしました。

<参加者の感想>

- ・日本の数年前のデパートという感じだった。

1-5 参加者リスト（敬称略、兵庫県教育委員会、小学校、中学校、高等学校の種別内で五十音順）

	氏名	勤務先（学校名）	担当教科
1	古角 美之	兵庫県教育委員会事務局人権教育課	子ども多文化共生教育
2	岸岡 歩	西宮市立神原小学校	
3	日下部 望	西宮市立甲陽園小学校	
4	柴田 貴也	神河町立粟賀小学校	視聴覚・情報
5	濱田 理	芦屋市立朝日ヶ丘小学校	
6	大窪 麻紀	百合学院中学・高等学校	国語（中学）
7	岩本 芳仁	神戸市立六甲アイランド高等学校	地歴・公民
8	藤川 綾香	兵庫県立加古川南高等学校	家庭科・福祉

同行者

	氏名	所属先・役職名
1	西 紀世美	JICA 兵庫 国際協力推進員
2	吉井 さやか	青年海外協力協会(JOCA)近畿支部 職員

※「教師海外研修」（全体総括、データ整備、事前研修、海外プログラム準備、海外研修（同行ファシリテーター、研修管理調整）、成果品作成、帰国報告）を実施するにあたり、その運営を円滑かつ効率的に進めることを目的として、当該業務の実施を青年海外協力協会近畿支部に委託した。

1-6 主要面会者リスト

	氏名	所属先名	役職名など
1	坂本 隆	JICA インドネシア事務所	所長
2	水野 隆		次長
3	坂根 宏治		主査
4	福田 千秋		ボランティア調整員
5	Erina Nakamura Saragih		ナショナル・スタッフ
6	Sulistyo Wardani		ナショナル・スタッフ
7	Mulyuno Lodji		ナショナル・スタッフ (NGO-desk)
8	福岡 誠行	生物学研究センター	JICA 専門家
9	小林 浩		JICA 専門家
10	Achmad Dinoto		プロジェクトマネージャー
11	近藤 信行	マルチメディア訓練センター	JICA 専門家
12	長谷川 裕子	ジョグジャカルタ デポック郡第5中学校	青年海外協力隊員 (理数科教師)
13	朝山 雄一郎	インドネシア国家警察 スマラン警察士官学校	青年海外協力隊員(柔道)
14	幸池 勇平	ジョグジャカルタ国立大学	青年海外協力隊員(料理)
15	滝沢 直美	ジョグジャカルタ 第4国立実業高校	青年海外協力隊員(料理)
16	神谷 菜津美	メダン観光専門学校	青年海外協力隊員(日本語教師)
17	安達 恵子	ジャワ島中部地震復旧復興支援 プロジェクト	一般短期ボランティア 看護師
18	京口 美穂		一般短期ボランティア 栄養士
19	浜元 聡子	京都大学東南アジア研究所 (ジョグジャカルタ特別州バントウル県ゲシアン村)	研究員
20	Anto	環境関連 CEP・BINA SWADAYA (NGO) PAHALA コミュニティーグループ	代表
21	Siang	バントウル県 SEKOLA LUAR BIASA 養護学校	職員

2. 研修報告書

2. 研修報告書

2-1 出発前

(1) 研修に期待すること

<古角>

- ① 本県の子ども多文化共生教育の推進に寄与する体験や出会いがあること。
- ② 参加者個々の専門分野または担当分野に関する情報あるいは資料を見つけること。
- ③ 参加者自身の仕事や生き方の再認識や変革につながる活動を行うこと。
- ④ 一人でも多くの関係者や関係機関とネットワークを構築すること。
- ⑤ 研修先や内容等に対する事前情報や固定観念を凌駕する人・ものとの出会いがあること。
- ⑥ 研修を終えてから、改めてふりかえることができ、なおかつ深めることができる題材を見つけること。
- ⑦ 国際社会における教育・文化や生活に関する課題を身近なものにすること。
- ⑧ 研修先での課題や解決方法が日本における課題や解決方法の糸口やロールモデルになること。
- ⑨ 民族・人種、歴史、習慣・文化等が異なる人との出会いを通じて、人間としての共通点を探ること。

<岸岡>

日本には知らないことのできない子どもたちの生活の様子を実際に確かめてみたい。文献や資料だけでは思い込みや誤解があると思うので、子どもたちの夢や日ごろ抱いている思い、生活環境をできるだけ直接子どもたちと触れ合いながら直に学びとる機会を多く持てることを期待する。

具体的には、子どもたちの生活リズムに焦点を置いて、日本の子どもたちと何が同じで何が異なっているのかということが、児童たちには一番興味関心が高いところだと思うので、今後の授業に生かしやすいような教材を収集できる機会を持つことを期待する。

日本では入手困難な教科書や辞書なども手に入れるチャンスなのでインドネシア国籍の児童に対する母語教室にも生かせる教材も集めたい。

<日下部>

- ① 普通の観光旅行では経験出来ない現地でのホームステイや現地の学校訪問。
- ② ネットや本ではわからない現地の様子を肌で感じられること。
- ③ 他の学校の先生方との交流や指導法の勉強。
- ④ JICA青年海外協力隊の生の声が聞けること。
- ⑤ 現地の方々の生の声が聞けること。
- ⑥ JICAのプログラムや出前講座を今後学校へフィードバック出来るようになること。

<柴田>

現在の日本では、インターネットやテレビ、新聞などを通じて、世界の様々な情報を簡単に知ることが出来るようになっていきます。しかし、「百聞は一見にしかず」ということわざがあるように、インドネシアまで足を運び、そこで活動しておられる青年海外協力隊やシニア海外ボランティアの方々の活動を、実際に目で見る事ができることに大きな価値があると思います。私自身が小学校教師という立場で、インド

ネシアの学校(小学校・中学校など)に訪問し、子どもたちとの交流やどんな学習をしているのか知ることができると大変魅力的です。片言の英語とインドネシア語、そしてジェスチャーでどれだけ子どもたちの心をつかむことが出来るのか不安もたくさんありますが、楽しみな気持ちの方が強いです。民家でのホームビジットでは、観光旅行では、なかなか感じることのできない、現地の人々のくらしや生活、習慣など多くのことを学ぶことが出来ると思います。今回の教師海外研修が、自分自身にとって大変貴重な体験になることは間違いないと思っています。

<濱田>

現在、クラスにインドネシアの子どもが在籍しています。少し物静かで、こちらの言ったこともほとんど分かっており、クラスの中でも普通に生活しています。しかし、クラスの子ども達も普通に接している分、もっとインドネシアのことを知ろうという雰囲気はありません。私としては、せつかくの機会なので、その子を通してもっと国際理解を深めてほしいと思っています。今回の研修で、その取り組みのための材料やきっかけをつかみたいと思っています。多くのインドネシアの人々に接して、たくさん話をして、豊かな体験をし、それを子どもたちに伝えたいと思っています。

<大窪>

本やインターネットでは知ることのできないものを、まずは身体(五感)で感じ取ってきたいと思っています。そのときの空気、におい、気温、音、味などその場でしか味わえないものをつかみ、帰国後なるべく近いように生徒に伝えられたらと思います。子どもの笑顔など、一般の旅行ではできない体験、つかめないものに期待します。文化の違いは生徒たちにとってとても興味を引くものですし、それを映像や具体的な「もの」で示すことには大きな意味があると思います。写真やビデオだけでなく、お菓子や調味料、教科書や文房具などの「もの」を手にするによって心に残るものも違ってくるように思います。教科書や資料集だけでは得られない何かを伝えられたらと思っています。文化の他には、ゲシアン村でのホーム・ビジットや中学校訪問を通して言葉の違う人々(子ども)との交流をはかりたいと思っていますし、震災のあった地を実際に訪ね、そこにいる人々やそれを支援する人の「生の声」を聞くことができればと思っています。ストリートチルドレンの施設も訪問できるということで支援がどのようになされているか、実際に目で見て確かめたいと思います。そして、いろいろ見て聞いたことから、現実に「途上国」といわれる国にどのような問題が残っているのか、どのような支援が必要なのか考えてみたいと思っています。その考える一つのきっかけとしてこの研修が大きな意味をもたらしてくれると思いますし、そのような研修にしたいと思っています。

<岩本>

日頃授業で取りあげてはいるが、自らの知識も乏しい開発途上国について、現状や内部を実際に目にする事で、より深い内容が伝えられるように実りある研修にしたいと思う。特に、日本の国際協力の実践や現地の人々との交流などを通じて、生徒達に伝えられる話題を少しでも多く得てきたいと思う。

また他校種・他校の先生方の実践や姿勢から、学ぶべきことは少しでも多く学びたい。

<藤川>

教科指導に活かせるように、教材となるものを持ち帰りたい。家庭科では、食文化や民族衣装を切り口に、風俗・文化・宗教がどのように影響しているのかを生徒に考えさせる教材を見つけたい。

また、福祉の授業では開発途上国の状況について生徒たちと考えたいと思っている。福祉は、すべての人々が幸せに暮らすことを最大の目標に考える教科である。開発途上国の子どもたちの置かれている状況を写真に収めたい。特にストリートチルドレンの施設訪問に期待している。また、ゲシアン村の子どもとの交流もリアルに子どもの様子がわかるので、映像として生徒に見せたい。今回の研修で私自身が経験したことを通し、豊さ＝幸せではないこと、貧しさ＝不幸ではないことを生徒たちに伝え、高校生として国際社会の抱える問題に何らかの形で参加できることを考えさせたい。

もう一つにはマレーシアへの修学旅行が11月にあり、「外国＝先進諸国」というイメージを持つ生徒たちに、決してマイナスイメージを持たせることなく、開発途上国の現状と高校生にできることを考えさせたいと思う。

(2) 日頃の開発教育／国際理解教育の実践を通じて感じていること(問題点)

<古角>

- ① グローバル化が進展する中で、自国の伝統・文化を尊重すること。
- ② 他の国や地域についての理解を深め、人権尊重の精神を基盤として、異なる伝統・文化に敬意をはらう態度を育成すること。
- ③ 自他の相違を理解し、相互に尊重しあう意識を身につけ、国際的な視野に立って自らの考えや意見を述べ、主体的に行動する態度や能力を育成すること。
- ④ キーワードは、「自己実現」「共生」「ネットワーク」。
- ⑤ 外国人児童生徒の自尊感情を高め、アイデンティティの確立を支援する環境づくり。
- ⑥ 母国の文化や言葉にふれたり、歴史などの認識を深めたりする学習機会の充実。
- ⑦ 「子ども多文化共生センター」や国際交流協会、NGO・NPO等の関係機関・団体との連携。
- ⑧ 外国人児童生徒在籍の有無にかかわらず、各学校において子ども多文化共生教育、国際理解教育の観点からの支援・指導体制の確立。

<岸岡>

インドネシアに関する情報を子どもたちに伝える際に、私が直接経験したり目にしたことを伝えるわけではないので、情報に曖昧な点があったり臨場感にかけられる場面が多々あると感じる。

また、本クラスにインドネシア児童がいるが、本人たちも家庭の事情からインドネシアに対する文化や生活に関する知識に偏りがあることがある。日本に永住するわけではなく数年で帰国する彼らに、本国の様子を伝えることは大変重要な課題である。

<日下部>

- ① 日常のカリキュラムや雑務が多く国際理解教育を進める時間が限られている。
- ② 学校全体での取り組みではなく、学校内の協力が得にくい。
- ③ 総合の時間の学年での方向が決まっていて自分だけでは進めにくい。
- ④ 具体物などの教材が限られている。
- ⑤ 評価の方法。
- ⑥ 自分の(国際教育に関する)経験不足。

<柴田>

神河町の特徴として、町全体で国際理解教育(主に英語活動)のカリキュラムを作成し、1～6年生までが英語活動に取り組んでいます。授業の形態としては、ALTの先生とのチームティーチング方式で月2回程度おこなっています。子どもたちもALTの先生との英語活動の時間を大変楽しみにしており、コミュニケーション能力の育成を重点目標において進めています。しかし、異国の文化に触れる、体験するという面では、もっともっとそういう機会が必要であると考えます。

<濱田>

国際時代を迎え、本校では数年前から毎年、インドネシア・中国・韓国などの国籍の子ども達が在籍しています。今年度はインドネシア国籍2名、韓国籍2名、中国籍1名が在籍しています。また、この夏は4名の体験入学児童がありました。海外の日本人学校に在籍し、夏休みの間日本に帰ってきて日本の文化(学校教育)を体験しようというものです。このような状況を受け、本校の国際理解教育はそれぞれの国の文化の違いを知り、理解し、友だちと仲良くなることを目指して取り組んできました。保護者の方にその国の料理を教えていただいたり、遊びを紹介していただいたりして、生活を中心とした文化の違いを理解することができつつあります。

一方で、国際理解教育＝英語教育という傾向が強くなってきています。本校でも、年間10時間、国際理解教育として英語の時間をとっています。

<大窪>

途上国の発展のためには「支援」が必要だといわれていますし、その支援が一時的な「もの」や「こと」ではなく、その国や人々が継続的に自立していくための支援であるにはどのようになされるべきか、難しいものだと思っています。その国の風習や人々にあったものでなくてはならないし、それにはその国の文化を知ることとても大切だと思います。かなり時間のかかることだと思いますし、「人」とのつながりなしではできないものなので簡単ではないと思います。そして、それを生徒などに伝えていき、伝えるだけでなく実践につなげるにはどうしたらいいか、この研修で何かをつかみたいと思います。

また、環境問題を考えると、日本とインドネシアの関係も大きく影響しているように思います。それについて現地の人々はどのように思っているのか、どれほどの意識をもっているのか、常に疑問に感じていました。本当の「開発」は利益だけを求めるものではないと思います。そのあたりを現地の人々の意識をとりえながら考えてみたいと思います。

<岩本>

「真実」を伝えること、「最新の情報」を伝えることを念頭に、授業を通して「人権教育」、「平和教育」につながることを重要視している。

教師サイドの工夫や伝達方法により、生徒の興味・関心の示し方や、モチベーションもかなり差ができてくるので、教授法の向上がより求められる時代となった。教師も日々、自己啓発に努めなければならないと感じている。

その一方で、教育課程の改変で、外国の歴史や地理についての知識はたいへん乏しく、授業の本題の前に、それらの基礎知識を身につけさせる必要がある。

<藤川>

特に開発教育や国際理解教育を中心になってやっているわけではないので、感じている問題点などは、はっきりと指摘できないが、高校の国際理解教育は、ある特定の教員や、ある特定の教科で主に行われており、多文化共生の学習も、学校によってまちまちである。

開発教育はどんな教科でも行われるべきだと思うし、総合的な学習の時間でももっと活かしていきたいと思う。

(3) 海外研修に向けての抱負(目標)

<古角>

- ① 気負わず、焦らず、あきらめず。
- ② 貪欲に見聞し、柔軟に対応する。
- ③ 日本人から国際人へ。
- ④ 一人でも多くの人と接し、一つでも多くのものと出会う。
- ⑤ ゴールをめざして、一人の百歩ではなく、全員の確実な一步を刻む。

<岸岡>

- ① 何でも吸収し、できるだけありのままのインドネシアの様子を伝えられるように努力する。
- ② 分からないことは何でも、特に現地の人たちに対して質問する。
- ③ できるだけ多くの具体物を収集し、授業で教材として提示できるようにする。
- ④ 現地の子どもたちとかかわり、考えや生活リズムなど生の声を少しでも聞きだす。

<日下部>

- ① 何事にもチャレンジしてみたい
- ② 今後の国際教育に役立つ資料、教材集め
- ③ 現地の方との積極的な交流
- ④ 簡単な言語やダンスなど文化の習得
- ⑤ 自分の課題の発見

<柴田>

自分から、積極的にコミュニケーションをとっていくことを第一の目標にしたいと思います。インドネシアでの貴重な体験を少しでも多く、目の前の子どもたちに、また学校全体に伝えていくことが出来たらと考えています。有意義な研修になるようにがんばりたいと思います。

<濱田>

- ① 子どもたちとたくさん接したい。子どもたちの笑顔を写真に撮りたい。
- ② 子どもたちの夢や今一番楽しいこと、なやみを知りたい。日本の子どもたちと比較し、検証したい。
- ③ 子どもたちの中で、流行っているものや流行っている遊びを知りたい。
- ④ インドネシアと日本を比べて、違っていることや、同じであるところ、「!」、「?」を探したい。
- ⑤ インドネシアの食べ物を満喫したい。
- ⑥ 学校での子どもたちの様子、授業の雰囲気を知りたい。

<大窪>

自分ひとりではできないような体験ができると思っているので、そのような体験を通して自分の感じたことをまずは生徒に伝えたいと思います。自分がそれまで抱いていたものとどれだけ違っていたか、逆にどのような点が似ていたか、具体的な「もの」や映像を用いて伝え、自分の目で見て、自分の身体で感じる

素晴しさを感じてもらいたいです。さらに、自分だけの捉え方ではなく他の方の意見も聞き、見聞を広げていきたいです。ひとつの見方ではなく、さまざまな方面から見てお互いの視点を共有したいです。

<岩本>

- ① インドネシアという国を知る。
- ② インドネシアを通じて日本をさらに知る。
- ③ わずか8日の滞在期間、寸暇を惜しんで知識欲を持って行動する。

<藤川>

- ① 見たいもの → スーパーマーケットの品物とその物価、マクドナルドの比較
- ② 買いたいもの → 食材(香辛料やテンペの材料)、バティック染めの布
- ③ 見たいもの → 子どもの学習している様子
- ④ 知りたいこと → 介護はどのように行われているか、福祉政策はどのようになっているか
- ⑤ 聞きたいこと → ホームビジットで、その家族が大切にしていることは何か、一日の生活のリズム
- ⑥ 知りたいこと → ジャワ島の地震復興の支援がどのように行われているか、他民族がどのように共生しながら暮らしているか

2-2 海外研修

(1) 良かったと感じた(期待に応えた)海外研修の内容(上位5件)

順位	訪問先名	理由
1	ゲシアン村 (日本文化紹介・ホームビジット)	<ul style="list-style-type: none"> ・現地の子どもたちと直に話す機会があったので、現地の遊びや子どもたちの将来の夢など貴重な情報を手に入れることができた。 ・インドネシア人の家庭に寄せていただき、手作り料理をご馳走になり、言葉は通じないながらも、大きな親善・交流ができた。 ・ジャワ島中部地震後1年を経過した被災地である当所を訪問し、日本文化を通じた交流による心と心のふれあいができた。また、浜元氏による「プカランガン」設置の取組に感銘を受けるとともに将来にわたる災害対策モデルとしての可能性を強く感じた。 ・言葉が通じなくても伝えることができるということが分かりました。私たちの文化にも興味をもってくれ、人の温かさを感じました。 ・普通の旅では決して知ることのできないような交流ができたこと。私たちのために、お昼ご飯をつくってもてなしてくださったこと。 ・現地の人々と直接交流ができ、実際の生活の様子がわかった。現地の小学校や先生方の様子がわかった。インドネシア語を使い現地の方と話げできた。 ・実際にインドネシアの小学校の子どもたちや家族と日本文化を教えてあげることを通して触れあえたことが一番大きい。
2	ジャワ島中部地震復旧復興支援プロジェクト現場	<ul style="list-style-type: none"> ・最も被害を受けた地域の復興の現状を実際に見ることができたが、お二人の被災者との出会いは本被災地での象徴的な事例であり、共通性と対照性を実感するとともに、今なお復興途上であることを痛感した。また、当地におけるJICA緊急支援の在り様を2人の青年海外協力隊員を通して知ることができ、人的支援の熱い思いを感じることもできた。 ・被災した状況や、開発途上国が抱える医療問題を考えるきっかけになった。また、支援のあり方も考えさせられた。 ・それぞれに「強さ」を感じました。そして、その「強さ」が周りの人々に支えられている「力」からきていることを知り、感銘を受けました。 ・暖かく歓迎してくださって、地震についてお話をしていただき、インドネシア政府の動きやJICAの取り組みがわかった。 ・家族や親戚などの絆を大事にしていること。それが、生きる力になっていることを感じた。反対に、一人で生きていくのはつらいことも感じた。自立のための支援が本当の支援だと感じた。 ・地震で、下半身の自由がきかなくなって車いす生活になられても教師としてもう一度がんばろうとしておられたから。自分自身が勇気ももらった。
3	デポック郡第五公立中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に子どもたちの授業風景や教室の様子、ノートの板書などありのままの姿を

	<p>(青年海外協力隊員・理数科教師活動現場)</p>	<p>垣間見ることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の様子、休み時間の様子を実際に見ることができたうえ、交流場面も作っていただいた。どこの国も子どもは宝であると実感できた。 ・中学校での教育がどんな感じで行われるのかを知ることができた。また、ソーラン節を中学生が見て、掛け声を一緒にかけてくれた。 ・現地の中学生と交流ができた。実際の授業の様子を見ることができた。 ・中学校ではあるが、子どもたちの普段の学校の様子を見ることができたし、趣味や日常の生活を知ることができた。何より、沢山の笑顔を見ることができた。 ・中学生との交流ができたことと、学校や授業の様子も分かったこと。
4	<p>ペーパー・リサイクル技法を通してのストリートチルドレンのエンパワーメント SetiaKawan Raharja Foundation訪問</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・開発途上国の大きな問題であるストリートチルドレンへの支援例を見ることができ、同時に彼らの「生きる力」も感じられたから。 ・彼らが誇りを持って仕事をしている姿が印象的でした。反面、抱えている不安や問題も多く、実際にそれを見て、聞いたことは意味深いです。 ・仲間の大切さ。夢を持ってがんばる姿を見させてもらった。「一番の楽しみ」が、「みんなで一緒にいること」が特に印象的である。
5	<p>Bina Suwadaya PAHALAコミュニティーグループ (環境関連の市民社会の参加によるコミュニティー開発技術協力)の視察</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・開発途上の国における環境問題対策は、まだまだ時間もお金も必要で、その上、意識変革が重要であるが、地域全体でゴミのリサイクルを進め、生活向上にあたる姿は当国の将来像を想像させるとともに、その過程においては多くの課題があることも認識できた。

(2) 収集した資料／教材

<古角>

- ① 写真映像(訪問地の風景、町並み、現地の人々、研修及び交流の様子)
- ② 小・中学校用教科書等(小1国語A・B、小1算数、中1国語、中1数学、インドネシア全図)
- ③ 伝統文化に関する資料(影絵芝居用ワヤン人形、椰子の実製マラカス)
- ④ 訪問先提供のパンフレット類と成果物(リサイクル品等)
- ⑤ インドネシア紙幣と貨幣

<岸岡>

資料としては子どもたちの生活リズムの様子、家族構成、将来の夢、今一番大切なもの、インドネシアの伝統的な遊びなどを、ホームビジット、ストリートチルドレン施設、中学校への訪問の際にインタビューを行った。また、青年海外協力隊の具体的な活動や、ODAがどのようにインドネシアで行われているか、という情報も各施設に訪問した際に手に入れることができた。

具体的な教材としては、ペン、ノート、修正液などの子どもが普段使用している文房具、教科書や絵本などの書籍、流行している音楽のCD、紙幣などを教材で使用するために購入した。

また、食事や街の風景、子どもたちの遊びなどの写真や画像も数多く収集した。

どの資料も極力子どもたちが、自分の生活と比較がしやすく、かつ、興味関心を引くことができるものということを念頭に置きながら資料・教材を収集した。また、日本文化が世界に広く受け入れられているという観点からインドネシア語に翻訳されている日本の漫画も収集した。

<日下部>

- ① インドネシアの都市部・農村部の写真
- ② 学校や授業中の様子の写真
- ③ インドネシア語の教科書やマンガ(書籍)
- ④ インドネシア国旗
- ⑤ インドネシアの地図
- ⑥ 現地の調味料
- ⑦ 現地のお菓子
- ⑧ 現地の料理の写真
- ⑨ 現地の遊びのビデオ
- ⑩ 現地の子どもの作品

<柴田>

- ① 紙幣、楽器、民族衣装、ビデオ
- ② ゲシアン村での交流から、小学生の遊びや夢について
- ③ インドネシアの人々の一日の生活
- ④ 青年海外協力隊員のがんばっておられる様子
- ⑤ シアンさんのがんばっておられる姿

⑥ 被災地で感じた地震の怖さとボランティアの方々の温かさ

<濱田>

(写真)

- ・露店の様子 ・ガソリン販売(露店) ・携帯電話プリペイドの値段表 ・ゴミ箱(校外の)
- ・バイクの多さ(2人乗り) ・交通渋滞(交通マナーの悪さ) ・学校前のおやつ屋
- ・子どもたちの写真 ・民族楽器

(購入したもの)

- ・体育や音楽の教科書 ・インドネシアの地図 ・コミック(コナン・ドラえもんなど)
- ・料理の本 ・日本語ガイドブック ・絵本 ・ハラルマークの入ったスナック菓子
- ・調味料(サンバルソースなど) ・アイドル雑誌(タブロイド紙) ・袋麺
- ・ストリートチルドレン施設で売っていた紙やノートなど ・虫の入ったキーホルダー
- ・日本のアイドルが表紙のクロスワードパズル ・ノート ・色鉛筆
- ・巾着袋(被災地の方が作ったもの) ・民族楽器のCD ・人気バンドのCD

<大窪>

- ① 世界地図、地図帳・・・インドネシア語で書かれ、地図帳にはインドネシアの文化(衣・食・住・宗教など)が絵で描かれている。
- ② 価格を示すもの・・・マクドナルドの価格表、スーパーの写真(藤川先生撮影)、他の先生のフリーの日の資料。
- ③ アンケート・・・インドネシアの公立中学3年生におこなったもの。
- ④ 映像・・・被災された方をはじめ現地で活動している日本の方のインタビュー、インドネシアの街並み、屋台、タクシー、道路、トイレなど
- ⑤ 写真・・・世界遺産「ボロブドゥール遺跡」や夜の「プランバナナ」、民族舞踊の映像
- ⑥ おかし、香辛料(食)・・・「HALAL」マークのついたスナック菓子・「サンバル」という一般的な香辛料
- ⑦ 特有の物(衣)伝統的な織物・・・「バティック」の布、イスラム教徒のかぶりもの(肌を見せない)、楽器

<岩本>

(写真)

訪 問 先:インドネシアの家屋、台所、料理、家畜、ヤシの実採集、震災跡など
授産施設:作業の様子、材料(バナナの繊維)、商品など
学 校:授業風景、休み時間の様子、掲示物など
その他 :ボロブドゥール、ジャカルタ市街、ジョグジャカルタ市街

(その他)

バティック染め(ホームビジットの土産)、学校の成績表サンプル、土産品(竹製ボールペン、牛革製しおり、絵はがきなど)

<藤川>

(写真)

- ・スーパーマーケットの写真や日常生活のわかる写真
- ・ゲシアン村の交流の写真を使って、高校生の自分なら日本の何をアピールしたいか考えさせたい
- ・ジャカルタの都市部の写真と農村の写真を見て、格差について考えさせたい
- ・イスラム教について考えさせたい(服装・建物・HALALマークなどの写真)

(ビデオ)

- ・ジャワ島中部地震の被災地での、シアンさんのインタビューのビデオ
- ・中学校での訪問のビデオ

(その他)

- ・物価の価格表をつくりたい
- ・アンケートの結果を使って、意識の違いについて考えさせたい
- ・子どもの幸せとは、家族の意識とは

(3) 授業・学校生活への活用

<古角>

- ① 子ども多文化共生センターでの展示及び学校・個人への貸出(常時)
- ② 兵庫県主催「ひょうご・ヒューマンフェスティバル2007inたつの」(8月)への出展
- ③ 兵庫県教育委員会・JICA兵庫主催「子ども多文化交流&JICA国際協力フェスティバル2007」(11月)での出展
- ④ 兵庫県教育委員会主催人権教育研修会(管理職、指導主事等、担当教員対象)における参考資料として提供
- ⑤ 人権教育に関する各種研修(企業・事業所、公的機関等)における学習資料として

<岸岡>

今後の授業展開としては、子どもたちにインドネシアの概要を説明・紹介した後に自分たちでこの国の何を調べたいかでグループ分けし、調べ学習を行おうと考えている。そのため、導入の際にジャカルタや村の様子分かるように写真や画像を活用したい。また、紙幣や食事の様子などは子どもたちの関心を引くためにぜひとも活用したい。

また、子どもたちが調べ学習をする際の手助けやヒントとして、伝統的な遊びや文房具・書籍などは使用している様子を交えながら子どもたちに紹介していきたい。しかし、すべての情報を最初から与えてしまうのではなく、できるだけ子どもたちの疑問や調べているテーマに沿うように提示していきたいと思う。そして、この学習のまとめとして、青年海外協力隊の活動を含むODAの支援内容がうまく子どもたちに入っていくように各施設の様子や活動なども提示できるようにしたい。

<日下部>

- ① インドネシアの紹介に写真や国旗、地図を使う。
- ② 都市部、農村部の写真から日本との共通点、相違点を考える。
- ③ 教科書やマンガから日本との共通点をさがす。
- ④ 料理の写真を見た後に、お菓子や調味料を食べて味覚でインドネシアを感じる。
- ⑤ 現地の遊びを紹介し、実際に遊んでみる。
- ⑥ 現地の子どもたちの作品や、自分たちの作品を比較し、現地の子どもたちが持っている写真からインドネシアを身近に感じる。

<柴田>

- ① 紙幣や楽器、民族衣装、ビデオなどは、インドネシアを知るきっかけ作りをしたい。
- ② ゲシアン村での交流から、小学生の遊びや夢について考えさせたい。
- ③ ゲシアン村でのホームビジットからインドネシアの人々の一日の生活を知る。
- ④ 青年海外協力隊員の頑張っている様子を伝える。
- ⑤ シアンさんの頑張っている姿から、つらいことがあっても前向きにがんばろうとする姿勢を伝えたい。
- ⑥ 被災地訪問から感じた地震の怖さとボランティアの方々の温かさを伝えたい。
- ⑦ ゴミの問題について考えさせたい。

<濱田>

- ① スナック菓子やジュース缶についている「ハラルマーク」を使って⇒多民族共生を知ってほしい。
- ② 漫画・アイドル雑誌・バンドCDを使って⇒若い世代の子どもたちは共通点が多いことを知ってほしい。
- ③ お金やインドネシアの物の値段を使って⇒物価について考えてほしい。
- ④ 子どもたちの笑顔の写真・アンケートの結果・インドネシアの学校の様子の写真を使って⇒インドネシアの子どもたちの様子を知り、身近に感じてほしい。
- ⑤ 被災地の方の話、ストリートチルドレンの話、ホームビジットの様子、バイクの3人乗りの写真を使って⇒仲間や家族の絆は生きるための大きな支えになることを考えてほしい。
- ⑥ 校外のゴミ箱の写真、ゴミ処理の現状、PAHAMAの取り組みを紹介して⇒リサイクルの意識、ルールやマナーを守ることの大切さを考えてほしい。
- ⑦ インドネシアの様々な写真を使って⇒日本との共通点や文化の違いを考えてほしい。
- ⑧ JICAの取り組みを紹介することから⇒本当の支援とはどんなことか考えてほしい。

<大窪>

今、地理の授業などでもあまり詳しく一つの国について学ぶ機会がないようなので、この機会に日本ともいろいろな意味で(歴史的にも、貿易などの経済的な面でも)つながりの深いインドネシアという国を紹介したいと思っています。実際、援助もしているのですが日本が頼っている部分もあるので、「国際理解」というものが一面ではないことを考えさせたいと思っています。物価を示す写真、トイレや街並みの写真、楽器やお菓子などの手に触れて感じる「もの」を用いて文化を、現地で働く日本人、現地の通訳さんのインタビューの映像を見せて考え方を、被災地の人々の話から問題点を考えさせたいです。

他の国を知るということは同時に自分の国を知り、自分のおかれた境遇を見直すことだと思っています。私たちがどのような点で恵まれているのか、どのような点が問題となっているのか、「自分たち」に目を向けるきっかけにして欲しいと思っています。

<岩本>

日本の国際協力、ストリートチルドレンを授業のテーマとして予定しているので、写真は適切なものを抜粋し、視聴覚教材を作成する。また、インドネシアという国をより把握させるために、基礎的な地理・歴史のほか、今回の研修で得た話題を随所に挿入し、理解を深めさせる。

さらに日本とインドネシアとの関係、方向性などにつなげていきたい。

<藤川>

修学旅行の事前学習で、2つのことをおさえたい。

ひとつには、開発途上国についての理解を深めさせたい。貿易ゲームや身近な商品を使って日本との関係について考えさせたり、フォトランゲージを使って、それぞれが持つ開発途上国に対する固定概念や偏見について気づかせ、考えさせたいと思う。

もうひとつはイスラム教を含む文化を理解しようとする態度を育みたい。衣文化や食文化、特に家族観や家庭観、生活観はイスラムの影響を大きく受けている。生徒たちが、自分と異なる宗教に対して、どのような態度で臨めばよいかを考えさせたい。違うところを誇張するのではなく、違いを楽しむ姿勢を見につけさせたい。

教科学習では、家庭科では「フードデザイン」でインドネシアの調理実習をしたり、「発達と保育」で子ど

もの幸せについて考えさせたりすることができそうである。福祉では、「社会福祉基礎」でインドネシアの学習を通して貧困について考えることができると思う。ただ、総合学科なので、授業が学年全員ではなく、選択者だけの学習になる。

(4) 海外研修に関する全般的な所感・意見

<古角>

- ① 訪問先については、JICA並びにJOCAの便宜や伝手により、一般的な観光や訪問では行くことのできないところばかりであったので、内容の広がりや深まりにおいて実り多い研修ができた。
- ② ホームステイが間際で中止になったが、それに余りある現地の人々との交流ができた。
- ③ 訪問先は主にJICA事業との関連があるところであったが、予算規模の大小だけではなく、人的支援の様子や青年海外協力隊員との交流は大いに参考になった。

<岸岡>

今回の研修は自分だけでは経験することのできない数多くの施設や機会が設けられていたのでとてもよい勉強になった。また、同時に自分のクラスにインドネシア人児童がいるにもかかわらず、自分のこの国に対する知識・理解のなさに気付かされた。開発途上国と一くくりで言ってもそれぞれの国によって状況は全く異なるのでありステレオタイプで物事を捉えることの危うさを認識できた。

また、青年海外協力隊の活動を含むODAの具体的な活動を見ることができた。この経験は将来にわたって世界の中での日本の役割を子どもたちに伝える際にとっても有意義であると感じた。ほんの一部ではあるが実際に自分が目にしたものを伝えることで、より子どもたちにこの問題について考えるきっかけになってほしい。

<日下部>

- ① インドネシアを様々な側面から見ることができて本当によかった。
- ② インドネシアの方々の、生の声を聞くことができてよかった。
- ③ ホームビジット等通常では経験できないことができてよかった。
- ④ 青年海外協力隊員の実際の活動現場や活動内容を見ることができてよかった。
- ⑤ もっと色々な学校を見学したかった。
- ⑥ ミーティングが長引いてしまった。

<柴田>

海外研修を通して、インドネシアの方々のだれでも受け入れようとする温かさを感じた。日本人やインドネシア人の枠を超えて、人と人との交流やコミュニケーションができたことが嬉しかった。また、普通の観光旅行では、味わえないような子どもたちとの交流やホームビジット、そして被災地訪問は、限られた時間ではあったけれども自分自身にとって忘れることの出来ない貴重な体験となった。これらの本物の体験から学んだことを子どもたちに伝え、考えさせていきたい。

<濱田>

教師という立場から、インドネシアの子どもたちと触れ合いたいという思いは非常に強かったです。そういう観点から見れば、様々な場面で多くの子どもたちと触れ合えたことは、非常に有意義でした。

国が絡んでのプロジェクトはさすがに規模が大きく、日本以上に立派な設備が作られていると感じました。一方で、ストリートチルドレンの支援や、PAHAMA(環境問題に取り組むNGO)の取り組みをさらに国全

体にどのように広げていくか考えさせられました。

インドネシアの人々と触れさせていただき、家族や仲間の大切さを改めて感じさせてもらいました。「ゴトン ヨロン(互助・助け合い)」の精神を国民の大半が意識していることはとてもうらやましいと感じました。反対に、それに甘えている国には、少し考えてもらいたいところもありますが・・・うまく融合できれば世界が注目するすばらしい国になるように思えました。

ストリートチルドレンの施設を訪問して、たくましく、自分の夢を持ち、何も無いところから自分でかせる、自立した子どもたちに感動しました。

青年海外協力隊員の方々の方々の実際の活動現場をもっと見たかったです。直接的な現場はやはり胸に来るものがありました。

<大窪>

第一に、自分では気づかなかった見方や捉え方ができたことが一番嬉しく思います。毎日の意見交換は非常に有意義なものでした。お互いで共有できた気持ちは尊いものでしたし、違う捉え方には新しいものを見出させてくれました。自分ひとりではできない体験も多く、見聞が広がりました。担当の方が要求を受け入れてくれ、それに応えていただいたことにも感謝します。現地で活動している日本人はもとより、現地の人々(子ども、中学生、大人)のふれあいが多かったことがよかったです。その交流についてみんなで考える時間があつたこともよかつたと思っています。

<岩本>

毎日、あっという間に過ぎ、連日、内容の濃い充実した研修が続いたと思う。ミーティングはできれば食事前に終えたいところだったが、限られた日程の中で研修内容の充実を求めればいたしかたないと思う。

研修内容の企画・構成や、訪問地、現地施設との調整などたいへんな作業だったと思うが、おかげさまで、通常ではできない貴重な経験をさせていただいた。深く感謝するとともに、この有意義な海外研修を、今後も継続していただきたく思う。

<藤川>

とても充実していた。本当に忙しく、余裕がなかったが、食欲にいろいろなものを見たり聞いたりできてよかった。聞いたことをゆっくりまとめたり、次の質問を吟味したりする時間があまりなく、訪問先で失礼な質問をしたのではないかと心配になったが、どのようなことでも誠実に答えていただき、私にとっては勉強になった。

2-3 帰国後 ～来年度に向けて～

(1) 派遣前研修に関する所感・意見

<古角>

- ① 訪問先についての知識、経験も研修者により差異があり、概ね浅い状況にあることから、今回のように期間を空けて事前研修を2回設定することで、各自の意識や意欲も計画的に向上していくことができたので、研修者全員が揃うことを前提に初回事前研修開催日を早期に設定すること。
- ② 全体での共通理解を図るための講義や説明の場面とは別に、小グループによる個々の理解状況の把握や整理の時間は大変効果的であった。
- ③ ブレーンストーミングやKJ法等、参加体験的な手法での研修は、研修者自身の主体性を尊重すると同時に研修者相互のコミュニケーションを図る上で大変よかった。
- ④ 全員でなくてよいので、1～2名または小グループの代表による意見発表等を行うことで、各自の自覚を高めるためにも次年度に向けて検討願いたい。
- ⑤ プログラム内容ごと(訪問先)のJICAとの関連や訪問先相互の関係性をできるだけ事前に説明をいただけると、現地研修のイメージ化がいっそう図れるのではないかと考える。

<岸岡>

まず、第1回事前研修ではインドネシアの概要を中心にオリエンテーションを行っていただいたので、ある程度の知識を持って授業実践の計画や現地での行動の心構えをもつことができた。特に指差し会話帳を頂いたことで事前に質問事項の作成や簡単な自己紹介の文を考えることができた。さらに、現地でも様々なコミュニケーションの際に大いに役立った。本当は会話帳を自分で購入すべきなのだろうがどれが良いものなのか知識のない私には本を頂いたことが非常に助かった。また、ワークショップで研修の中で互いに気持ちよく生活するための心がけについてブレーンストーミングを行ったことで普段意識していないことを文章にすることにより意識できるようになった。この文章化して、意識を強めるという手法は学級の中でも幅広く用いることができると思う。また、初対面の方々がどのような考えをもってこの研修に臨んでおられるかを感じ取ることができたので、人間関係構築のよいきっかけにもなったと思う。

第2回事前研修では、実践計画を参加者全員で吟味し、改善や修正を加えた。これにより、自分ひとりでは思いつかなかったアイデアや構成、指導案を頂くことができた。特に、私の指導案は、まだ不完全や曖昧な部分が非常に多かったのでこの活動はとても役に立った。特に、普段は交流の少ない中学校や高校の先生方の指導案も見ることができたことは良い経験だったと思う。さらに、自分の実践の課題や具体的に手に入れたい教材や資料を明確にし、それを十項目にまとめることで研修中ずっと自分のしなければならぬことを意識できた。

<日下部>

- ① 語学だけの時間があっても良かったと思う。
- ② 後1～2回程、参加者が集まってもいいと思う。
- ③ 最初の研修から少し間隔が開き、もったいなく感じた。
- ④ 実際に現地に行っておられた方の話が参考になった。
- ⑤ 指導案についてのフォーマットがあるのであれば、早めにもらいたかった。
- ⑥ 訪問先の詳細や日程など、もっと前もって資料が欲しかった。

⑦ 共通の出し物により、参加者同士のつながりが深くなり、とても有意義であった。

<柴田>

派遣前研修により、インドネシアの現在の状況が大まかにつかむことができた。どういうことに気をつけなければならないのかがよく分かった。また、派遣前研修で今回、一緒に参加することになった先生方と訪問先での日本文化の交流のための南中ソーランの練習や話し合いを通じて、かなり親しくなれたような気がする。全体が一致団結することが出来れば、海外研修でもいい成果が得られると思う。

<濱田>

2 回程度でよかったと思う。ただし、交流の練習や足りないものの買出しのことを考えると、2回目の研修は午前から始めるか、交流練習の日を設定したほうが、時間的に余裕が持てたのではないかと思う。

会話の研修があれば、少しは自身を持って飛び込めたかも。聞きたいことをインドネシア語でどうか勉強してから行くのもいいかも。

<大窪>

実際にインドネシアにいた方のお話はとても参考になりました。特に担当の方から事前に「何か質問など、聞きたいことは？」と言っていたので、その部分について回答があったことがよかったです。その国の教育のこと、宗教のこと、環境問題のこと、風習などその場で生活していなくては分からない「生の声」が聞けたことがよかったです。それを踏まえて、現地でどのような質問をしようか、何を準備していこうか(アンケートなど)考える基になりました。もちろん、持ち物として何が必要か、どのようなことに気をつけなくてはならないか(治安の面でも、人々との交流の部分でも)を具体的に教えていただいたことはイメージがわき、とても参考になりました。そして、実際に何をを用いてどのように生徒に伝えていくかというワークショップも自分の現地での「資料集め」にとっても有効でした。帰国してからどのように授業を展開していくかは重要ですし、自分でも悩んでいた部分ですので、それを実際におこなった先生の報告は為になりました。自分でも授業展開の方向性が少しつかめたように思います。実際に行く先生方とその国についてのイメージを出し合ったりお互いの意見交換をしたりしたことも、研修をより有意義で快適なものとするのに大切なものでした。そのおかげで研修の間、とても気持ちよく過ごすことができました。

<岩本>

派遣国の実情を知るうえで、たいへん役立った。また、自身の海外研修への意欲がより高められるような内容であった。参加者の親睦を深める内容の研修もあり、良かったと思う。

<藤川>

とても役立った。どんなメンバーがいるのか知ることができる。特に、インドネシアで青年海外協力隊として活動していた方の話は、インドネシアのイメージをつかみやすかった。

服装については、イスラム圏への理解が少なかったこともあり、自分の服装が適切であったか不安が残る。自分自身の反省だが、事前にイスラム教への理解を深めておいて参加することが必要だった。

(2) 海外研修に関する所感・意見

<古角>

- ① 研修先での進行やお礼の言葉、また、毎日のふりかえりや記録などの役割分担を全員でできたことは、各自のモチベーションと有用感を高めて日々の研修ができた。
- ② 現地研修プログラムに、事前に研修者の興味・関心や希望を把握したことを反映していただいたことにより、企画へも参画でき、研修への参加意欲にもつながった。
- ③ JICA関連の事業や施設、関係者を中心に研修先が決定され、合理的・効果的な日程を組んでいただいた。すべての研修先の状況を把握できる資料を整えることは無理であり、実際に訪問した際に調査・収集すればよいことではある。また、その方が(事前研修や資料がなくても)新鮮で意欲的な研修につながるように思う。

<岸岡>

研修はどの場所も普段では行くことのできないものばかりでとてもよい経験ができた。しかし、本当に様々な場所の視察ができるので事前の指導案や計画を行い、目標をしっかりと定めておかないと手に入れられる情報や資料が多すぎて結局活かしきれなくなる恐れがあると思う。だから、毎日のミーティングや振り返りの中で常に取捨選択を行い、どれを自分が授業で使うかをしっかりと見極めなければならぬと強く感じた。見ることができる場所や経験がすべて活かせるわけではないことを認識して研修に臨むべきだと思った。

また写真や映像などは思いがけずいいものが撮れる機会が訪れる。常に自分がほしい材料を意識しながら移動中なども周りに気を配っておく必要がある。外国の鉄道や町並み、救急車やポストなどの公共物は子どもの興味をひくものなので自由時間や移動の際には気をつければよかったと思う。

<日下部>

- ① とても意味のある研修で今後も続けて頂きたい。
- ② 各訪問先に関して、先生方の希望との関係を開示してもいいのでは。
(例えば:A先生は環境問題について詳しく知りたいので環境関連CEPを視察します。など)
- ③ ホームビジットではなく、ホームステイが良かった。
- ④ もっと色々な学校を訪問したかった。
- ⑤ 全体的にもう少し時間に余裕が欲しい。

<濱田>

ジャカルタでの半日フリーの日がほしかったです。ジョグジャカルタと比較したり、「？」や「！」をもっとさがしたりしたかったです。ジョグジャカルタでもホテルの前の通りに文房具屋や散髪屋がありました。1回目のフリーで発見し、2回目のフリーで買い物等をするのもよかったかもしれないです。(近場でいろいろな発見ができたみたいで残念でした。)まったく1日フリーの日を作ってもいいかもしれません。

青年海外協力隊員との夕食会はとても有意義でした。特に後半に入っていたので、聞きたいこと、知りたいことがいっぱい聞けました。来年も、あればいいと思います。

<柴田>

普段、開発途上にある国の現状を知る機会は、ほとんどないように思う。そんな中、教師である私たちにチャンスを与えてもらえることは大変ありがたいことだと思う。この目で見てきたことを、子どもたちに伝えていくということは、とても大切なことだと思う。海外研修によって、自分自身も子どもたちにも今までは見えてこなかった新たな世界が見えてくるのではないのでしょうか。

<大窪>

ホームステイがなくなり、残念に思っていましたがいよいよいろいろな交流があり、とても有意義でした。普通では体験できないようなことが多く、いろいろな面で便宜をはかっていただいたことが分かります。ストリートチルドレンの訪問や被災地訪問では施設見学のみでなく、そこでの日本人スタッフの説明や実際に生活している子どもや人々の「生の声」を聞くことができましたし、果物をいただいての直接の説明など「見る、聞く」だけではない感覚でとらえるものも多かったように思います。それをどのように子どもたちに伝えていくかは今後の課題ですが、私自身、感じるだけでなくそこから考えさせられることが非常に多かったように思います。そしてそれを他の方々と出し合い、深めることができたことは大きな意味がありました。正直、インドネシアという国はイメージと違うこともあり、実際に良い面も悪い面も見えましたが、何とんでも「人々の温かさ」を強く感じました。そして「子どもの笑顔」は同じだとも思いました。それを感じることも人々との交流の機会(そのような企画)が多かったからだと思います。言葉の違う人々との交流でも何かの形で通じ合うことはあると感じることができました。

<岩本>

個人の旅行では(たとえバックパッカーだとしても)とても行けないような場所の訪問ができ、新しい発見の毎日であった。ジャワ島だけで、しかもジャカルタ、ジョグジャカルタ近郊だけで、2万近くも島があるインドネシアを知ったとは言えないが、机上の学問では味わえない実体験だった。

何事にも貪欲な知識欲を持ち、積極的に現地の人に交じって行く姿勢が大切だと思う。

<藤川>

- ① ホームビジットのおみやげは、ある程度統一したほうがいいかもしれない。大量に持っていく人と、少ない人の差がでるのは、よくないかもしれない。
- ② 撮った写真は共有できるが、ビデオは難しい。また、アンケートなどもどの程度共有できるのかについては明確にしておいたほうがいいかもしれない。
- ③ 体調管理の難しさを感じた。私は健康がとりえだと思っていたが、出発前にまとめて仕事をやり、なんとか準備してそのまま研修に参加したら、睡眠不足や食べ物が影響して、不調になった。余裕をもって行動ができるようにしたい。

(3) 今後の本研修参加者へのアドバイス

<古角>

- ① 開発教育や国際理解教育への興味・関心と意欲が大前提。これまでの実践・実績の有無ではなく、今後の学校教育への還元のため、そして、自己の見識や経験の向上のために。
- ② 訪問先ではやはり現地の言葉で。参考書片手でも指差しでも大いに結構。まずは、間違っている、正しくなくても積極的に現地の言葉を使って交流することをめざそう。
- ③ 集団での研修です。大いに語り、飲み、歌うことも大切です。一人で研究したり、収集したりするより、絶対内容の濃いものになる。自分にはないものをきつと、仲間は持っている。仲間にはないものを、あなたが持っています。大いにネットワークを広げましょう。
- ④ でも、同じ目的を持った研修団でも、価値観や人生観は同じではないでしょう。互いの個性を尊重し合うことは基本です。その上で、大いにこの研修を楽しいものにしてほしいと思います。

<岸岡>

まずは、事前にしっかりと意図を持って研修に臨むのが大前提だと思う。どのような資料が必要なのか、そのためにはどのような準備物、質問事項を考えておけばよいか、またそれをどのような形で現地の人に伝えるかなど細かい点までしっかりと明確にしておく必要があると思う。また、今回記録係を作っておいたことはとても良かったと思う。しかし、写真の数がとても多くなってしまったので、もう少し撮影している人を限定すれば、被写体をかぶらせることなく撮影ができると思う。

あとは、現地の言葉を間違えてもいいのでドライバーさんなどにも積極的に使っていったほうが勉強になると思う。何事にも挑戦し、自ら体験することは貴重な経験になると信じてチャレンジする気持ちを忘れないことが研修をさらに有意義にすることができると思う。

<日下部>

- ① 何事にもとにかくチャレンジ。
- ② ある程度の語学力の習得。
- ③ 見たこと、学んだことを一日ごとにまとめる。
- ④ 健康管理。
- ⑤ 屋台の食事や危険な食べ物は最終日にまわす。
- ⑥ 周りの先生方やJICAスタッフの方々との協力。
- ⑦ 時間を守る。
- ⑧ 子どもの作品をプレゼントすると喜ばれる。
- ⑨ カメラやビデオは常に撮影できる状態にしておく。

<柴田>

なかなか余裕は無いかもしれませんが、事前に少しでも現地の習慣や言葉について、勉強しておいた方がよいと思います。一番実感したのは、ホームビジットの時に、片言の英語とインドネシア語でどうにかなるかなと考えていたのですが、どうにもなりません。ある程度は、コミュニケーションがとれるのですが、もっと言葉が話せたらなあと思つづく思いました。

学校現場やホームビジット先では、日本のグッズ(写真・剣玉・コマ・折り紙・扇子・食品)がかなり喜ばれます。日本の遊びや料理を通して、子どもたちや家族のみなさんと交流することが出来ました。

ビデオと写真は、毎日分担して撮ったのでよかったのですが、ビデオの本数がかかなり多かったため、帰国してからDVDに記録するのにかなり時間が必要でした。もし、パソコン(大容量のハード)を現地に持って行けるのであれば、大変ですがその日に撮ったビデオは、その日のうちにDVDに記録しておくことをお勧めします。

<濱田>

- ① ホームビジットする場合は、大人も含めて楽しめるものを用意しておいたほうがいいです。(みんなでソーメンを作るなど)折り紙も簡単なものができるようにしておいたほうがいいです。(鶴は難しい！)
- ② お土産の説明を現地の言葉でできるようにしておいたほうがいいです。話が広がると思います。
- ③ せっかく質問しても返事が分からないことが多いです。辞書を持っていき、答えてもらうといいかも。(辞書を引くつらさを分かち合おう！)
- ④ いろんな場面で子どもたちに接する機会があります。交流グッズは余分目に持って行き、子どもたちとの交流が組み込まれていない時でも持つておく役に立ちます。(シャボン玉はいいかも！)
- ⑤ とにかく、「！」「？」を探そうという気持ちで行くと、いっぱい見つかります。授業の導入にすると思えばわくわくしながらさがせますよ。
- ⑥ 現地で流行っている漫画のキャラクターグッズは何か持っていくといいですよ。子どもたちと打ち解けるアイテムとしては最高です。(私は携帯に写真をとって持って行きました。)
- ⑦ 下痢止めは必須アイテムです。おなかに来そうな食べ物は研修の後半にとっておきましょう。
- ⑧ その国の情報は事前にチェックしておくといいと思います。写真やビデオにとっておきたいものも最低限準備できます。(私の反省です。)
- ⑨ 研修を楽しもうと思わないと、いろんなものを見逃してしまいますよ！(肩肘をはりすぎないように！)
- ⑩ とにかく体験してみましよう。話をしたとき、それが一番子どもたちに伝わります。

<岩本>

同行の職員の方々をはじめ、参加者一行がお互いに尊重しあって連帯感を持つことができれば、より楽しく充実した研修になること間違いなし。何でも見てやろう、聞いてやろうの「積極的な姿勢」と「謙虚さ」との兼ね合い、また、「郷にいれば郷に従え」の態度も必要でしょうか。

貴重な体験を通し自分の財産をつくる研修ですが、「生徒のため(生徒への還元)」の気持ちが大切だと思います。ハードスケジュールの毎日なので、体調管理は結構重大なポイントです。

<藤川>

事前に、その国のことを調べれば調べるほど、充実したものになるように思う。今回は、前もってアンケートを作成しておいた人や、帰ってからの授業の視点を「環境問題」とはっきり決めておく人がいて、そういう姿勢は、見習いたいと思った。私は、その国にいかないとわからないと決めてしまっていたが、決してそんなことはないと思った。